

あいびき

堀辰雄

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）小径こみちが

……一つのこみち小径が生い茂った花と草とにおお掩われて殆ど消えそうになつていたが、それでもどうやら僅かにその跡らしいものだけを残して、曲りながらその空家へと人を導くのである。もう人が住まなくなつてから余程になるのかも知れぬ。それまで西洋人の住まつていたらしいことは、そのささやかなみかげいし御影石の間には嵌めこまれた標札にかすかに A. ERSKINE と横文字の読めるのでも知られる。

その空家は丁度或るやや急な傾斜をもった坂道の中腹にあつた。一たいに坂道というものがどれでも多少人を夢見心地にさせる性質のものである。そういう坂道の中途まで来てふと足を止めた瞬間、ひよいとそんな荒れ果てた庭園が目に入るので、人はますますその空家を何だか夢の中でも見ているような気がするのである。

或る日のこと、その坂道を一人の少年と一人の少女とが互いに肩をすりあわせるようにして降りてきた。小さな恋人たちなのかも知れない。そう云えば、さつきから自分等のための「love-scene」によいような場所をさんざ捜しまわっているのだが、それがどうしても

見つからないですっかり困ってしまっているような二人に見えないこともない。

そんな二人がその坂の中途まで下りて来て、ふと足を止めて、そういう絵のような空家とその庭とを目に入れたのである。それを見ると、二人は互いに目と目でこんな会話をしたようだった。「ここなら誰にも見られっこはあるまい」「ええ、私もそう思うの……」

そう決めたのか、二人はその坂の中腹から彼等の脊ぐらいある雑草をかき分けながらその空家の庭へずんずんはいつて行った。ちょっと不安そうな眼つきで横文字の書いてある標札をちらりと見ながら……

その庭園の奥ぶかくには、彼等が名前を知らないような花がどっさり咲いていた。少年はその一つの叢むくを指しながら、

「やあ、薔薇ばらが咲いていらあ……」と、いくぶん上ずった声で云った。

「あら、あれは薔薇じゃありませんわ」少女の声はまだいくらか少年よりも落着いている。「あれは蛇莓へびいちいよ。あなたは花さえ見れば何でも薔薇だと思う人ね……」

「そうかなあ……」

少年はすこし不満そうに見える。それから二人は黙ったままその空家のまわりを一巡して見た。窓硝子まどガラスがところどころ破れている。

が、その破れ目から二人がいくら脊伸びをして覗のぞいて見ても、ひっそりと垂れている埃ほこりまみれのカーテンにさえぎられて、その中の様子はよく見えなかった。それでも台所のところなどは内部がちらりと見えた。そこなどはいろんな台所道具が雑然と散らかっていて、

中には倒れたまんまのもあり、そしてそれらのものは一面にこぼれた壁土のようなもので埋もれていた。どうやら震災の時からそっくりそのままにされているらしい。この家の持主である外国人は震災の時死んでしまったかも知れない。二人はその空家を垣の途中から最初見たときふと彼等の心に浮んだ或る考えをいつか忘れてしまったかのように、そんなことばかりしゃべり合っている。

が、その家の裏手に、その庭園から丁度露台へ上るような工合にして直接にその家の二階へ通じているらしい、木薦きじょうたのからんだ洋風の階段を見出した時に、少年よりいくぶん早熟ませているらしい少女は思い切ったように言った。

「ちよつとあれへ上って見ないこと？」

「うん……」少年は生返事をしている。

「そんなら私が先へ行くわ……」

それでもと云いかねて、やはり少年は自分が先に立ってその木薦のからんだ階段をすこし危なっかしそうな足つきで上って行った。

が、その中途まで上ったかと思うと、少年は急に足を止めた。その壁の上に彼の顔をあか赧くするような落書の描いてあるのを発見したからである。少年はくるりと踵かかを返すと、

「やっぱり悪いから止よそうよ」と云いながら、ずんずん一人で先に降りてしまった。少女はそこに一人きり取り残されて、しばらく呆あっ気にとられているように見えたが、やがて彼女も彼のあとを追った。

そうしてそのまま二人は彼等の「love-scene」には持ってこいに見えたその空家の庭からとうとう立ち去ったのである。

少年はその家を遠ざかるにつれ、つくづく自分に冒険心の足りない

いことを悲しむばかりであった。そうしてその辺の外人居留地かも知れない洋館ばかりの立ち並んだ見知らない町の中を少女と肩をならべて歩きながら、そういう弱虫の自分に対して自分自身で腹を立ててもいるかのように、急に何時いつになくおしゃべりになった。

「君、メリメエという人の小説を読んだことがある？」

「いいえ、ないわ」

「そうかい、僕はその人の小説がとても好きなんだがなあ……僕はその人の短篇でね、『マダム・ルクレエス街』というのを読んだことがあるんだ……その中にね、丁度、今みたいな家が出てくるんだぜ、それは伊太利イタリイの話だけれど……ところがその空家の二階の長椅子がね、一つだけ埃がちつとも溜たまっていなくて、何だか始終人に使われている見たいだったんだ……実はそこでね、每晚あるお姫様がその恋人とあいびきをしていたということが後でわかるんだよ。そう云えば、今のあそこの二階もね、僕は何だかそんな秘密でもありそうな気がしてならなかったよ……やはりさつき上って見ればよかつたなあ……」

「まあ……」少女はそんな突拍子もない少年の話を聴きながら顔を真っ赤にしていた。それに気がつく、少年も顔を真っ赤にした。

そうしてしばらく気まり悪そうに二人は黙って歩いていたが、今度は少女の方が口をきいた。

「あなたは随分空想家ね」

「そうかなあ……」どうもこれは少年の口癖のように見える。

気がついて見ると、いつの間にか二人の前には五六人の、支那人の子供たちが立ちはだかつていて冷やかすように彼等を見上げていたのである。二人は一層まごまごした。いつの間にこんな支那人町

へなど足を踏み入れたのかしら。……

それは何処どこの町にもぽかぽかと日の当たっているような、何となく
うっとりするような、五月の或る午後のことであった。

底本：「堀辰雄集 新潮日本文学」の「新潮社

1969（昭和44）年11月12日発行

1992（平成4）年5月20日16刷

入力：横尾、近藤

校正：松永正敏

2003年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。